

◎特集 「日本長寿社会」のパラダイムシフト（続）

堀内正範

「月刊丈風」編集人 朝日新聞社社友 高連協オピニオン会員

<http://ojin.jp> mhori888@ybb.ne.jp



・新世紀の潮流は「国際的高齢社会」の形成

新世紀のこの10年あまり、時流としての経済の「グローバリゼーション」（東アジア途上諸国の日本化、日本の途上国化）が際立ちましたが、その間も高齢者は、底流する潮流として、史上初であり、国際的に先行する「日本長寿社会＝超高齢社会＝三世代多重型社会」を形成して暮らしています。国の対策は延滞を余儀なくされ、個人的には実感しづらいですが。

世紀をまたいで21世紀の初頭にこの国で暮らすわたしたち「人生90年時代」の高齢者（65歳以上・「支える側」の高齢者＝現役シニア）層が中心になって、わが国固有の風土や伝統や文化を活かしながら、また個人的に培ってきた技術・知識・資産を活かしながら、これまでにない「成熟した姿のモノ・居場所・しくみ」を工夫してつくつてきましたし、今後もさらに新しい仲間たち（「団塊の世代」700万人の若き高齢者）を加えて展開していくことになります。

・平和裏に「三世代多重型社会」をめざす

活動のひとつひとつは水玉模様のように小さくとも、いずれはそれが重なり合って「日本長寿社会」を形成することになると想定されます。みんなが共有する意識として、1999年の「国際高齢者年」に国連が「すべての世代のための社会（society for all ages）」づくりを求めて提唱した「高齢者五原則」（自立・参加・ケア・自己実現・尊厳）があります。これらを体現しながら、わが国の高齢者は「平和憲法」のもとで「平和主義」を貫くことで、国際的にも評価される「高齢社会」の成功モデル事例を達成する途上にあります。

自治体のなかには先駆的に「高齢者（高齢社会）憲章」を掲げているところもあります。たとえば「南国市高齢者憲章」（2001年8月制定）は、「長生きは命の芸術品」ということばではじまり、「高齢者が培ってきた豊かな知識と経験を社会で活かすことのできるまちにしよう」と呼びかけています。また、高齢期に必要な知識や技術を学び、生涯の学友をうることができる地域生涯大学校のなかには、「いなみ野学園」（兵庫県）のように1999年に「いなみ野宣言」を発表した先進校も活動しています。

青少年・中年者・高年者がそれぞれに安心して暮らして、「人生の豊かな成果」をそれぞれに享受できる社会が「日本長寿社会＝超高齢社会＝三世代多重型社会」の姿です。20世紀後半期の「人生65年時代」から21世紀初頭の「人生90年時代」へ。

本誌は、小さいけれども強固な拠点としてその活動を展開してまいります。

20世紀後半期の社会

- ・「人生65年時代」 →
- ・支えられる高齢者 →
- ・「二世代+α型」社会 →
- ・「成長」力の時代 →
- ・標準家族・一人暮らし高齢者 →
- ・還暦・古希・喜寿・傘寿・米寿・→ →
- ・余生・孫育て →
- ・少子・高齢化社会 →
- ・ピラミッド型・瓢箪型人口構造 →
- ・団塊世代（昭和22～24年生） →
- ・青少年期に能力養成 →
- ・生涯学習 →
- ・国土の均衡ある発展 →

21世紀初頭の社会（◎今号の課題）

- ◎「人生90年時代」（65+25年人生）
- ◎支える側の高齢者・現役シニア・昭和丈人
- ◎「三世代多重型」社会
- ・「成長・成熟・継承」力の時代
- ・三世代同居・近居・地域包括ケア
- ・賀寿期五歳層ステージ
- ・自立・参加・ケア・自己実現・尊厳
(国連「高齢者五原則」)
- ・高齢社会・超高齢社会・長寿社会
- ・釣りがね型人口構造
- ・平和団塊世代（昭和21～25年生）
- ・高齢初期（60～65歳）に2回目の能力養成
- ・地域大学校
- （とともに）・個性ある地域の発展

◎「20世紀後半期の社会」から新次元の「21世紀初頭の社会」へ

・「高齢化社会」（高齢化率7%～14%・1970年～1994年）

高齢化（エイジング）はすすむものの、この時期はなお若年者・中年者による「成長活力」が中心で「二世代+α」型社会であり、少数である高齢者は「支えられる」側について、手厚い「社会保障」（医療・介護・年金など）を受けることができた。後人に敬愛されながらそれほど長くはない「余生」を送り、すべてを託して去ることができた。20世紀後半のよき「高齢化」時代であったといえよう。

この「高齢化」の期間が、フランスは115年、ヨーロッパ各国が半世紀余なのに対して、わが国がわずか24年間であったことは、「高齢弱者対策」に精いっぱい、「高齢社会対策」にまで手が回らなかったということになる。

・「高齢社会」（高齢化率14%～21%・1994年～2007年）

この時期になると、健康な高齢者の姿が目立つようになる。若年者・中年者による「成長活力」とともに、高年者（65歳以上）が保持する知識・技術・資産といった潜在力を活かした「成熟活力」による新たな「モノ・居場所・しくみ」づくりの展開にはいり、高齢者による高齢者のための地域づくり、職域づくりが競っておこなわれていい時期なのである。

わが国でも1995年に「高齢社会対策基本法」を制定し、1996年には「高齢社会対策大綱」を閣議決定して対応している。そして世紀末の1999年に開催された「国

際高齢者年」を通じて国連が要請したのは、21世紀を新たな平和の世紀とする高齢者参加の「長寿社会」の形成であった。自立し社会参加に意欲的な「支える側の高齢者」の登場で、この事業を国際的に先行する立場にあった日本は、国政の場で衆議して「日本高齢社会構想（グランドデザイン）」を掲げ、世界初のモデル事業を公開しながら展開する局面にあったのである。

が、まことに残念なことには国政の側にその視野がなく、全国的チャンスであった「市町村合併」の場に課題として「少子高齢化」を取り上げながら、そういう議論や機運は起こらず、構想不在のまま経緯したことが悔やまれる。「100年安心年金」（2004年）も、この基盤なしには「安心年金」になりえなかつたのである。その結果、「消費税」による財源確保という縦路に踏み込むことになった。

・「超高齢社会」（高齢化率21%～・2007年～・2012年は高23・3%）

高齢者による高齢者のための社会形成の時期を過ごして、この時期には、「三世代多重型社会」への展開がなされる時期にある。青少年・中年・高年世代がそれぞれの立場で「長寿社会」を考えるために「三世代会議」が必要となる。そして青少年・中年者による「成長活力」とともに、高年者（65歳以上）の保持する知識・技術・資産を活かした「成熟・継承活力」による「日本長寿社会」の達成が目標となる。三世代がそれぞれの立場で参加する史上初・国際的に新たな21世紀型社会の形成過程にある。

・「人生65年時代」 → ・「人生90年時代」（65+25年人生）

平均寿命でみると、

1955（昭和30）年 男 63.60 女 67.75

1960（昭和35）年 男 65.32 女 70.19

1985（昭和60）年 男 74.78 女 80.48

2010（平成22）年 男 79.55 女 86.30

20世紀後半に「人生65年時代」が長いわれ、いまでも国際的指標としては実用にされているが、わが国の場合はその後に急速な寿命の延伸がみられ、新世紀にはいったころには「人生80年時代」に、そして今般、「高齢社会対策大綱」（2012年9月に閣議決定）の改訂によって、「人生90年時代」が指摘された。だれもが「65年+25年の第三期の人生」の設計をすることになる。

・支えられる高齢者 → ・支える側の高齢者・現役シニア・昭和丈人

20世紀後半の「人生65年時代」には高齢者は「支えられる高齢者」として医療・介護の対象として扱われた。2012年改定の「高齢社会対策大綱」においては、「人生90年時代」の「支える側の高齢者」（現役シニア・本稿でいう昭和丈人）が指摘され、「高齢社会」形成の主役となる。いうまでもないが、3000万人の高齢者のだれもがたどる加齢による「体・志・行」の面での衰えの進行、「有訴」の出現、医療・介

護の必要など、2割ほどの「支えられる側」にある高齢者への配慮はわがこととして認めねばならない。

・「二世代+ α 型」社会 → ・「三世代多重型」社会

「人生のライフサイクル」として、個人的には青少年・中年・高年期があり、社会的には青少年・中年・高年世代がいる。そのうちの青少年・中年世代を「現役世代」とし、高年者を「被扶養者」として扱ってきたのが「二世代+ α 型」社会であり、高年者が自立して新たなコミュニティや居場所や日用品などをつくって暮らすのが「三世代多重型」社会である。21世紀型社会というのは、平均寿命延伸・高齢者増による単なる「高齢化社会」(エージング、ゴムひも型高齢化社会)ではなく、青少年・中年者による「成長社会」とともに、高年者による「成熟社会」が加わった多重構造をもつ社会である。